

Title	「エミリー・ディキンソンと寓意図」
Sub Title	Emily Dickinson and Emblems and allegories
Author	梶野, 緑(Kajino, Midori)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1985
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.47, (1985. 12) ,p.15- 1
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00470001-0231

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「エミリ・ディキンソンと寓意図」

梶野 緑

(I)

エミリ・ディキンソンの詩と、彼女が生きた十九世紀アメリカ・ニューイングランドにおいて広く読まれていたという寓意図との関連を、はじめて明らかにしたのは、George Monteiro, Barton Levi St. Armand 両氏であった。両氏がその論文 “The Experienced Emblem: A Study of the Poetry of Emily Dickinson” において¹⁾、主として言及している寓意図は、1851年に出版された John Barber と William Holmes による *Emblems and Allegories* である²⁾。これは、コネティカット州出身の木版画家 Barber の図版に、Barber 自身、および牧師 Holmes が注釈をつけたものである³⁾。注釈は「信仰心を鼓舞する」という教化的な意図のために、わかりやすい散文で書かれたものが多い⁴⁾。

寓意図は、英国においては、十六世紀に Geoffrey Whitney の *A Choice of Emblemes* が出版されて以来、十七世紀中頃に最盛期を迎え、Francis Quarles, John Bunyan といった寓意図作家を輩出した。だが、十七世紀も末になると、子供向けの教訓的寓意図を除いては、次第に下火となっていく⁵⁾。その一方で、アメリカにおいては、十九世紀も中頃になって出版されたこの Barber と Holmes による寓意図 *Emblems and Allegories* が好評を博したという事実は⁶⁾、ピューリタニズムが依然として、特にニューイングランドの人々の生活の中に深く根づいていたことを物語るものといえよう。

Monteiro, St. Armand 両氏は、ディキンソンの詩に、この寓意図から

の影響がみられることを、多くの例証を示して説明している。両氏が挙げている例は、これまでの詩の解釈をとときには覆すほどいづれも説得力がある。しかし、Peter Daly も警告しているように、寓意図と作品との一対一の対応関係を看破することは容易ではない。寓意図にしか見られない題材の処理の仕方を作品に見出したときにのみ、寓意図からの典拠であると証明できるからである。それゆえ、Daly は、「寓意図を作品の下敷きとして扱うのではなく、作品の横において作品の理解を深めるための鍵とすべきである」と説いている⁷⁾。

本稿では、この Daly の言葉を念頭において、ディキンソンの詩を *Emblems and Allegories* と照らし合わせ、両者の関係にあらためて考察を加えてみたい⁸⁾。

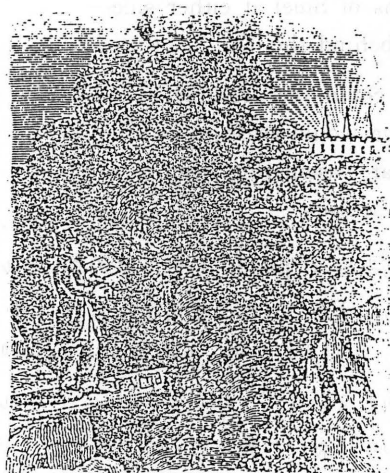
(II)

(1) 915 番の詩と寓意図 “Walking by Faith”

ディキンソンの詩を寓意図と照らし合わせて、まず気がつくことは、それまでは抽象的にしか把握されていなかった事物が、寓意図の助けを借りることによって、鮮明なイメージを持って視覚に訴えてくることである。しかしながら、たとえ寓意図に描かれている事物あるいは情景が詩の中のそれと重なり合うように見えても、「信仰心を鼓舞する」という寓意図の本来の意図が、彼女の詩において、そのまま透けて見えるということは稀である。

たとえば、915 番の詩を寓意図 “Walking by Faith” (1 図) に照らし合わせてみると、詩の中の情景がより鮮やかに見えてくることに気づく。しかし、この寓意図が描き出している確固とした信仰心には、疑問が投げかけられているのである。

この寓意図には、御覧の通り、“Faith” 「信仰」という文字の書かれた踏み板の上を渡る一人の男が描かれている。Barber と Holmes は次のような内容の注釈をつけている。



(1) Walking by Faith

「彼の前方は深い奈落の底から立ち上る黒い霧により閉ざされている。しかし、彼は依然として確かな足取りで細い踏み板 (“plank”) の上を進んでいる。彼が手に持つ本が彼の行く道を照らしているのだ。そして時折、風が吹き、立ちこめていた霧を一瞬の間、払いのけてくれる。その時、はるか向うにすばらしい宮殿が見える。そこへと彼の行く道は続いているのだ。」

なるほど、この注釈をもって寓意図を見ると、彼が手に持つ本(聖書と思われる)と、黒い霧の向うに垣間見える宮殿は明るく輝やいている。

次に 915 番の詩を掲げる。

Faith—is the Pierless Bridge
Supporting what We see
Unto the Scene that We do not—
Too slender for the eye

It bears the Soul as bold
As it were rocked in Steel

With Arms of Steel at either side—
It joins—behind the Vail

To what, could We presume
The Bridge would cease to be
To Our far, vascillating Feet
A first Necessity.

寓意図における踏み板 (“plank”) は、この詩においては、「目に見える世界と、余りにもかすかで目には見えない世界とをつなぐ」という “Pierless Bridge” 「橋脚のない橋」と表現されている⁹⁾。また、寓意図における黒い霧は、前方を蔽う “Vail” 「ベール」とされている¹⁰⁾。

しかし、寓意図の中において光を放っているもの、すなわち聖書も宮殿も、この詩には描かれていない。“Pierless Bridge” を渡る人は、ベールの向うに何があるか “presume” 「推測する」ことはできないのである。それゆえ、その足取りは、寓意図の人物のように確かなものではなく、“va[s]cillating” 「震えている」不確かなものとなっている。

ディキンソンは、この詩において、ベールの向うの世界に思いを馳せながらも、時折押しよせてくる懐疑の念に揺れ動く人間の姿を表わしている。そして、それはとりもなおさず、彼女自身の姿であったのではなからうか。Barber と Holmes が描き出したこの寓意図の人物が持つ確固とした信仰心は、ディキンソンにとって、かえって、自らの心の内に湧き上がる懐疑心を意識させることになったのである。

(2) 384 番の詩と寓意図 “Soul in Bondage”

ディキンソンは、しばしばこのように、Barber と Holmes が描く寓意図の情景に、自らの心の内を投影している。寓意図 “Soul in Bondage” 「とらわれた魂」(2 図) に描かれている情景も、384 番の詩においては、ディキンソンの心の中の風景と考えられる。

この寓意図には、御覧の通り、二人の人物が描かれているが、同一人物の魂と肉体を表わしていると思われる。すなわち、やせこけた方は肉体



(2) Soul in Bondage

を、もう一方は魂を象徴しているのである。Barber と Holmes は次のような内容の注釈をつけている。

「この魂を表わす人間は空を見上げ神に祈ることにより、この鎖でつながれた肉体から解き放されることができる。

また、籠から天へ向って飛び出している鳥は、魂が肉体から離れたことを象徴的に示している。」

次に 384 番の詩を掲げる。

No Rack can torture me—

My Soul—at Liberty—

Behind this mortal Bone

There knits a bolder One—

You Cannot prick with saw—

Nor pierce with Cimitar—

Two Bodies—therefore be—

Bind One—The Other fly—

The Eagle of his Nest

No easier divest—
And gain the Sky
Than mayest Thou—

Except Thyself may be
Thine Enemy—
Captivity is Consciousness—
So's Liberty.

この詩の第一、第二連は、Barber と Holmes の注釈の前半に重なるように思われる。

第一連で、ディキンソンは魂のことを、「この肉体の骨の背後に固く結びついている、より頑丈な骨」と表現しているが、“this mortal Bone” 「この肉体の骨」とは、まさしくこの寓意図においてもっとも生々しく描かれているもの、すなわち、胸に浮き出て見えるあばら骨を思い起こさせる。また寓意図に見られる魂と肉体を結ぶ鎖は、第一行目の拷問のイメージにつながる。

続く第二連、第三行目の “Two Bodies” 「二つの身体」は、寓意図における二人の人物であるとする、第四行にある “Bind One—The Other fly—” 「一つを縛っても、もう一つは飛び去る」とは、肉体は鎖で縛られていようとも、魂は神のもとへと飛翔するという寓意図の注釈に呼応するように思われる。

このように見てくると、私たち読者の頭の中では、“My Soul—at Liberty—” 「私の魂は一自由」と謳うディキンソンの姿は、寓意図の人物と重なっていく。しかし、果してディキンソンは、この詩の中で寓意図の人物のように、神に魂の救済をひたすら祈っているといえるだろうか。

第三連を見ると、ここでは、Barber と Holmes の注釈の後半において言及されていた飛翔する鳥が挙げられている。そして、その飛び立つ鳥（詩の中では驚と限定されている）に象徴される「肉体からの魂の解放」と並べて、さらに最終連にわたって述べられているのが、thou, thyself という二人称を用いて表現されている「自意識からの解放」という問題であ

る。

最終連、第一、第二行目では、“Except Thyself may be / Thine Enemy—”「あなた自身を除いて / あなたの自身の敵は—」と、自意識の迷宮の中をさまよう恐怖が暗示されている¹¹⁾。けれども、続く第三、第四行目では、捕えられていると感じることも、自由であると感じることも、共に意識の上での問題であると述べて、第一連における“My Soul—at Liberty—”「私の魂は一自由」という高揚した気分をかりうじて維持している。

だが、自由を意識と結びつけたディキンソンのこの最終行に、神への祈りを聞きとることは無理であろう。寓意図の人物にとっては、魂が肉体に捕えられていることも、そして魂が神のもとへと飛翔することも、すべて神の意志によるものであった。つまり、ここにおいて、ディキンソンの視線は、超越的な神を求めて天を仰ぎ見る寓意図の人物とは対照的に、ひたすら自己の内面へと向っているのである。

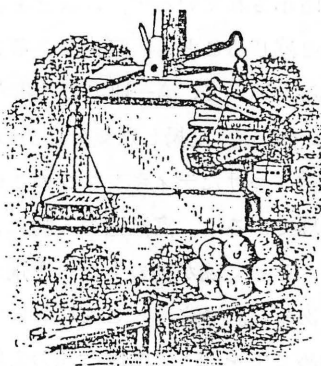
強い信仰心によって魂が肉体から解放された寓意図の人物の姿に、ディキンソンは自意識から解放された自己を夢みたのかもしれない。しかし、寓意図の情景をそれが意図するように、信仰心をきづなとした超越的な神と人間との関係において捉えるのではなく、自意識の束縛からのがれようとしている自己の心の風景としてディキンソンは捉えている。寓意図“Soul in Bondage”「とらわれた魂」の情景と重なり合うところが多いこの詩が問題としていることは、むしろ“Consciousness in Bondage”「とらわれた意識」であるといえよう。

(3) 632 番の詩と寓意図 “Weight of God’s Word”

詩人ディキンソンにとっては、このような「とらわれた意識」——自意識の迷宮——の中で生きることが、詩を創作する上での基盤として自己を見つめることであった。そして、詩の世界においては自らが創造主たり得るというディキンソンの自負は、すべてが超越的な神に集約される寓意図の世界とはときには真向うから対立したのである。

たとえば、ディキンソンの詩人としての自負が強く表われている 632 番

の詩は、寓意図 “Weight of God’s Word” 「神の言葉の重さ」(3 図) への挑戦の詩であるかのように思われる。



(3) Weight of God's Word

この寓意図には、御覧の通り、秤が描かれている。秤の右側には、Fathers, Creed, —ism といった人間、および人間が創造した概念がのせられている。Barber と Holmes は次のような内容の注釈をつけている。

「いったん、秤の左側に神の言葉、聖書がおかれると、右側にあるものは、虚無 (“vanity”) のごとく軽く舞い上がり、秤の竿は跳ね上がるのだ。」

確かに、秤は神の言葉へと大きく傾いている。この寓意図が意図したところは、もちろん聖書の重要性を説くことにあると考えられる。人間が神について述べるもろもろの言葉よりも、神自身の言葉を聞くためには聖書を読まなくてはいけないというのである。

ところが、ディキンズンは次に掲げる 632 番の詩において、この神の方へと大きく傾いた秤を、右側に詩人というものをのせることによって釣り合わせている。

The Brain—is wider than the Sky—
For—put them side by side—
The one the other will contain
With ease—and You—beside—

The Brain is deeper than the sea—
For—hold them—Blue to Blue—
The one the other will absorb—
As Sponges—Buckets—do—

The Brain is just the weight of God—
For—Heft them—Pound for Pound—
And they will differ—if they do—
As Syllable from Sound—

ディキンソンは、この詩の第一、第二連において、人間の脳は空よりも広く海よりも深いものであると述べ、想像力で自然をからめとることができるという詩人の自負を表現している。そして、第三連において、人間の脳と神の存在の重さを秤にかけ、“The Brain is just the weight of God—”「脳はちょうど神の重さに等しい」と断言するのである。しかし、このように言い切ったすぐ後に、ディキンソンは注釈めいた言葉を付け加えている。もし、この二つが釣り合っていないとすれば、その重さの違いはちょうど“Sound”と“Syllable”の違いに譬えられるものであるというのである。

ディキンソンは、ここで、“Sound”を神に、“Syllable”を詩人に結びつけていると思われるが、この二つの言葉が具体的にどのような違いを示しているかは定かではない¹²⁾。ただ、このような比喻を用いて、神と詩人との違いに触れることにより、これら二つを同じ秤に掛けること自体が無意味であることをほのめかしているのかもしれない。この詩の最後をこのような比喻で締めくくることによって、ディキンソンは、それまで完全に釣り合っていたかに見えた秤を微妙に揺るがしているといえよう。彼女にとっては、自らが創造する詩の世界も、神が創造した世界も、両方とも

天びんにかけられないぐらい重要であったわけである。

(III)

さて、これまでディキンソンの三つの詩をそれぞれ寓意図と照らし合わせてみた。もちろん冒頭でも述べたように、それぞれの寓意図がディキンソンの詩の下敷きとなっていると断定することは難しい。本稿では、「寓意図を作品の横に置いて、作品の理解を深めるための鍵とすべきである」という Daly の言葉を念頭において論を進めてきた。確かに、ディキンソンの詩が寓意図に照らし合わされたとき、私たち読者は詩を理解するための新たな鍵を与えられたように思う。

まず、寓意図が持つ視覚的イメージは、詩により鮮明なイメージを与えるのに役立った。「抽象的なものを知覚し、感覚的なものを思考する」¹³⁾ と Allen Tate によって形而上詩人に比せられたディキンソンの詩風は、具体的事物の視覚的イメージとそれにまつわる抽象的意味を同時に伝達できるという寓意図の伝統に源をおくのかもしれない¹⁴⁾。

そして、さらに興味深いことに、ディキンソンの詩を Barber と Holmes の注釈と照らし合わせてみると、ディキンソン自身の声がよりはっきりと聞こえてくるのである。これまで見てきたように、「信仰心を鼓舞する」という Barber と Holmes の意図に対して、ディキンソンは様々な反応を示していた。915 番の詩においては、確固とした信仰心を持ってベールの向うの世界を見ることに強い憧れを抱きながらも、自らの胸の内に湧き上がる懐疑の念を吐露していた。また 384 番の詩では、「肉体からの魂の解放」を「自意識からの解放」という自らの内なる問題として捉え、Barber と Holmes が描き出しているような超越的な神への信仰心には焦点を合わせていなかった。そして 632 番の詩では、絶対的な神への信仰心と拮抗するものとして、自我を基盤とした詩的創作の世界を提示していた。このように見てくると、ディキンソンの詩はそれ自体、この寓意図につけた彼女自身の注釈のように思われる¹⁵⁾。

たびたび信仰復興運動が吹き荒れていたという十九世紀ニューイングラ

ンドにおいて、ディキンソンは、生涯、信仰告白をしなかったといわれる¹⁶⁾。彼女にとって信仰告白とは、絶対的な神に身を委ねることにより詩を創作する上での基盤となる自己を失う恐れを孕む行為であったと思われる。三十歳を過ぎてからは、教会にも足を運ばず隠遁生活を送ったディキンソンは、執拗に自己の内面を見つめつづけたのである。1864年、詩人が三四歳の時に書かれた詩には次のような一節がある。“Explore thyself! / Therein thyself shalt find / The ‘Undiscovered Continent’—”「あなた自身を探検せよ / そこにあなたは見い出さだろう / 未だ発見され得ぬ大陸を」(832番) 1860年代といえば、まだフロンティア精神がアメリカに浸透していた時代である。その中において、ディキンソンはひとり一所にとどまり、徹底して自己と向き合ったところから、自らの内に湧き上がる懐疑の念、さらには自意識にとりつかれた自己というきわめて現代的なテーマをも詩の題材とすることができた。そして自分自身の中を探検し、自己という大地を踏み固めていくにつれて、詩人としての自負も深まり、詩人と神とを秤にかけてみるというような大胆な詩も生まれたのである。

十九世紀ニューイングランドの信仰心厚き人々に読まれていたというこの寓意図は、こうしたディキンソンの声をよりはっきりと捉えるための新たな鍵となり得ると思う。

註

- 1) *Prospect* 6, (September, 1982) pp. 187-280.
- 2) *Emblems and Allegories* (Cincinnati, Ohio: John H. Johnson, 1851) は、*Religious Emblems* (1846) と *Religious Allegories* (1848) が合本されたものである。
- 3) 寓意図とは通常、エピグラム、絵、注釈の三部構成を持つといわれる。この場合、注釈はエピグラムと絵との間の謎めいた関係を明らかにするものと考えられている。Peter Daly, *Emblem Theory* (Nendeln / Liechtenstein: Kraus-Thomson Organization Press, 1979) p. 22 参照。

しかし、この *Emblems and Allegories* には、エピグラムが少なく、絵はそれ自体で意味が十分に伝わるように描かれている。Barber は絵の中で頻繁に

文字を使用することによって、絵の自立性を高めたといえよう。注釈は絵の意味を補うものであり、あくまでもわかりやすさを主眼としていた。

- 4) Jean Seznec は、ルネサンス期の寓意図の中に、「秘教的方法の確立——神秘的言語となること」と「教化的であること——民衆的言語となること」という二つの矛盾する目的を認めているが、この十九世紀のアメリカの寓意図 *Emblems and Allegories* には、後者の目的のみしか窺われないのである。『神々は死なず』(高田勇訳、美術出版、1977) pp. 108-9 参照。

実際、Barber と Holmes の注釈は、“miniature sermons”「説教のミニチュア版」(Monteiro & St. Armand, p. 205) と評されるほど、「民衆的言語」となり得ているのである。Maria Skidmore は、未公開の博士論文 “The American Emblem Book and Its Symbolism” (Ohio University, 1946) の中で、ある無名の牧師がこの寓意図に対して送った次のような讃辞を引用している。

“I have a good library, but that little book fills a vacant place, and supplies a long-felt want. I can preach better since I have read it” (p. 142).

- 5) Rosemary Freeman, *English Emblem Books* (London: Chatto & Windus, 1948) p. 1
- 6) *Emblems and Allegories* と同じく Barber と Holmes による寓意図 *Christian Similitudes* (1860) に、John Bunyan の *Pilgrim's Progress* の要約を加えたという合本版の *The Bible Looking Glass* (1866) は、1880 年までに 12 万部売れたという。(Skidmore, p. 141)
- 7) *Literature in the Light of Emblem* (Tronto: Univ. of Tronto Press, 1979), p. 61.
- 8) 本稿では、三つの寓意図を掲げるが、(1) 図の “Walking by Faith” は Monteiro, St. Armand 両氏によっても言及されているもの (ibid., pp. 256-258) であり、(2) 図と (3) 図は、両氏によって言及されていないものである。図版は上記の Skidmore の論文の Appendix による。また、ディキンソンの詩、及びその番号は、*The Poems of Emily Dickinson* ed. Thomas Johnson (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1955) による。
- 9) この踏み板 “plank” のイメージは、280 番、875 番、1264 番、1433 番の詩でも用いられている。
- 10) Monteiro & St. Armand, p. 258 参照。

なお、両氏は論文のまとめの箇所 (pp. 265-266) において、ディキンソンの詩と寓意図との関係を Wylie Sypher の *Four Stages of Renaissance Style* (Garden City, N.Y.: Doubleday, 1955) に従って、(1) sedulous imitation (2) uneasy fragmentation and parody, (3) creative revision, (4) calm, meas-

ured stabilization の四つに分類している。この分類方法は、ディキンソンの寓意図に対する態度が多様性に富むことを示唆する点では有効であるが、一つの詩が必ずしも一つの分類の中に納まらないことを考えると、便宜的にすぎるように思われる。たとえば、両氏はこの 915 番の詩を (4) に分類しているが、“Pierless Bridge” つまり “Faith” そのものの必要性に対するディキンソンの揶揄をこの詩の最終連に読みとれば、(2) に分類することもできよう。

- 11) ディキンソンの詩の中には、自意識にとりつかれた自己を題材にしたものが多くある。たとえば 670 番の詩においては、もっとも恐ろしいことは “one's a' self encounter— / In lonesome Place” であるとして、“Ourself behind ourself, concealed— / Should startle most—” と述べている。
- 12) David Porter は、*Dickinson: The Modern Idiom* (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1981) において、この詩における “Syllable” と “Sound” の違いについて次のように説明している。

“Syllable was her sign for poetry speech, sound her sign for the unintelligible exterior world and the mystery of God” (p. 243).

また、Suzanne Juhasz は、*The Undiscovered Continent* (Bloomington: Indiana Univ. Press, 1983) で、“poetic creation” と “cosmic creation” の違いであると簡潔に説明している。

確かに、“Syllable” という言葉は、“poetry speech” “poetic creation” の意味で、544 番の詩においても用いられている。“The Martyr Poets—did not tell— / But wrought their Pang in syllable—”

また、“Sound” という言葉は、501 番の詩において、“This World is not Conclusion. / A Species stand beyond— / Invisible, as Music— / But positive, as Sound—” と、“the unintelligible exterior world” “cosmic creation” を示唆する場面で用いられている。

- 13) Allen Tate, “New England Culture and Emily Dickinson” in *The Recognition of Emily Dickinson* ed. Caesar Blake & Carlton Wells (Ann Arbor: Univ. of Michigan Press, 1964) p. 161.
- 14) Freeman は、形而上詩人 George Herbert と寓意図との関係について次のように述べているが、この言葉はディキンソンにもある程度通じるように思われる。

“The ability to express complex thoughts and sensations in poetry was typical of the metaphysical poets as a whole, but the precision and simplicity which Herbert achieved in his expression of them could perhaps be attained only when the emblem convention flourished” (ibid., p. 172).

- 15) Freeman は、「十七世紀の英国の寓意図作家には、Francis Quarles に見られるような詩的才能が要求されていた」と述べている。(ibid., pp. 133-4)

ディキンソンと Francis Quarles の寓意図, *Emblems, Divine and Moral* との関係は, Ruth Miller によって指摘されている。*The Poetry of Emily Dickinson* (Middletown, Connecticut: Wesleyan Univ. Press, 1968) pp. 271-288 参照。ただ, 主として掲げられている寓意図は一つだけで説得力に乏しい。Monteiro, St. Armand 両氏は次のように述べている。

“Quarles was only one of a number of emblematisers whose work continued to circulate on Emily Dickinson’s America, and it is our contention that Dickinson drew as much on a contemporary emblem tradition in accomplishing her poetic transmutations as she did upon the standard English model” (ibid., p. 189).

だが, もしディキンソンが Quarles の詩的才能にあふれた注釈に心を魅かれたとしたら, Barber と Holmes の散文による注釈には物足りなさを感じたに違いない。それゆえ, “I dwell in Possibility / A fairer House than Prose—” (657 番) と豪語する詩人であったディキンソンは, 自らの手で韻文による注釈を試みたのではないだろうか。

- 16) 1850 年, ディキンソンが二十歳の時に起こった 信仰復興運動は とりわけ大きいもので, まだ信仰告白をしていなかった父, 妹, 友人 Susan Gilbert (後に兄と結婚) が信仰告白を行なう。この年, 学友 Abiah Root にあてた手紙の一節で, ディキンソンは次のように述べている。

“The shore is safer, Abiah, but I love to buffet the sea—I can count the bitter wrecks here in these pleasant waters, and hear the murmuring winds, but oh, I love the danger!” *The Letters of Emily Dickinson* ed. Thomas Johnson (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1958),



Faith and Works

I, p. 104.

ここで思い起こされるのは、Barber と Holmes の “Faith and Works” 「信仰と仕事」と題された寓意図である。(Monteiro, St. Armand 両氏もこの寓意図を、ディキンソンの詩の中の sea imagery に呼応すると思われる寓意図群の中に入れている。p. 229 参照。) この寓意図には、御覧の通り、“Faith” と書かれたオールと “Works” と書かれたオールとを同時にこごうとしている男の姿が描かれている。ディキンソンにとっては、詩作という “Works” のオールをこぐことは、必ずしも “Faith” のオールをこぐことにはつながらなかった。“I love the danger!” というディキンソンの叫び声には、神の待つ安全な岸边をはるかに見やりながらも、詩作という “Works” のオールにより一層の力をこめ海上を漂うことへの詩人としての自負を感じるのである。